

時代を



読む

渡辺 利夫



東アジア共同体が今年のジャーナリズムの重要なテーマの一つであった。日本国内での議論はまだ収束していない一方、中国主導の東アジア秩序形成は着々と実を結びつつあるかにみえる。

「曖昧戦略」で中国外交に対応して勝ち目はない。日本は戦略思想においてなお薄い。東アジア共同体は、日本が海洋国家として生きていくのか、あるいは大陸国家との連携の下で生きるのかについての鋭い選択を迫るテーマにほかならない。

し、そこから深い知恵を学び取って行動の規範とするところにあるの身を守るかにあったと私は

「陸のアジア」「海のアジア」

「あらまほしき」アジアの秩序を論じるだけの国際経済学や国際政治学に信を置いて、日本外交の将来を構想するわけにはいかない。

近現代の日本にとつての最大のテーマは、巨大なユーラシア大陸の中国、ロシアに発し、朝鮮半島を伝わってせりだす「等

の日本であった。日清戦争の勝利によって日本が手にした遼東半島は、強圧的な三国干渉によって中国に返還を余儀なくされ、以降、ロシアの意のままとなった。清国に代わって、世界最大の陸軍大国ロシアが南下政策によって強い風圧を日本に吹きかけてきたのであり、この風

の蠕動を押しとどめて、日本は国力のすべてを日露戦争に注ぎ込んでこれに勝利することができたのである。

日露戦争勝利の外交的根拠は、日英同盟という「海洋国家同盟」にあったというのがこのポイントである。

(拓殖大学学長)